

渡らなくなった渡り鳥たち

渡り鳥は、春には繁殖地をめざして北上し、秋には越冬地へと南下する大規模な移動をします。このうち日本(その地域)を繁殖地にする渡り鳥を「夏鳥」、越冬地にするものを「冬鳥」と呼んでいます。

しかし、歳月が移ろう中で渡りをしないで、一年中その地域に留まって生活する留鳥になっていく渡り鳥も見られます。

① マガモ

マガモ(真鴨)は、俳句で冬の季語にもなっている冬鳥の代表です。長野県内では50年ほど前から繁殖が確認され、上伊那でもあちこちで繁殖が記録されています。

② ハクセキレイ

キセキレイやセグロセキレイは留鳥、ハクセキレイは冬鳥として、長野県や上伊那でもかつては位置付けられていました。今では、一年中普通に見られる留鳥です。

③ ジョウビタキ

オスは頭が銀白色、腹は赤茶色。庭先などにも姿を見せ、冬の風物詩として馴染みのある冬鳥でした。この数年は八ヶ岳山麓でいくつも繁殖例があり、2024・2025年度には伊那市でも繁殖の可能性が報告されています。

④ カンムリカイツブリ

長野県では諏訪湖などに、冬鳥として群れで渡来しています。約50年前に本州北部で、近年は琵琶湖や新潟県、東北地方の湖沼などで、繁殖例は増加傾向にあります。最近では県内でも繁殖が報告されています。2025年度も、天竜川の源である諏訪湖や佐久地方で繁殖を確認しました。



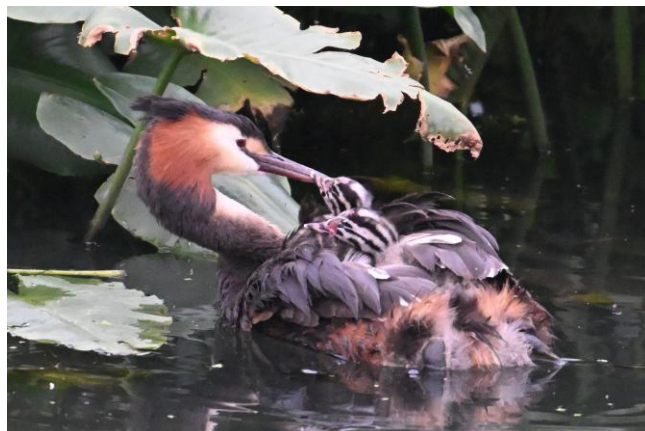
① マガモのヒナとメスの親鳥(撮影:戸谷省吾)



② ハクセキレイ(撮影:戸谷省吾)



③ ジョウビタキのヒナとオスの親鳥
(撮影:戸谷省吾)



④ カンムリカイツブリのヒナと親鳥(撮影:戸谷省吾)